

大学入試を追う

新課程 共通テストに向けて 一試作問題分析から一

2022年11月に、大学入試センターから、令和7年度(2025年度)大学入学共通テスト(以下、共通テスト)に関する検討状況が示されました。一部は予告・案という形になっているものの、出題教科・科目の出題方法、問題作成方針の検討の方向性、試作問題等が公表されました。新科目の問題構成や配点をはじめ、未確定とされていた部分はおおむね示され、新課程初年度の共通テストの概要が掴める形となりました。

今回の記事では、試作問題について、詳しく紹介します。Part1では、2025年度以降の新課程共通テストの概要と、試作問題の公表内容、今後のスケジュール、Part2では、河合塾の試作問題分析と、高校の先生方の分析や今後の指導に関するコメントをまとめました。そしてPart3の座談会では、試作問題『情報Ⅰ』と『旧情報(仮)』について3人の先生方に語り合っていました。

CONTENTS

Part 1	2025年度共通テストの概要	p8
Part 2	試作問題分析	p12
	地理歴史 公民 数学 英語 国語	
Part 3	座談会 「情報」試作問題分析と指導のポイント	p26

河合塾では、各種Webサイトで大学入試情報を公開しています。

<新課程>共通テスト 試作問題分析

本記事に未掲載の内容も含めて、河合塾による分析を掲載

河合塾 試作問題分析



<https://www.kawai-juku.ac.jp/exam-info/research/trial/>



2023年度 大学入学共通テスト特集

河合塾 2023 共通テスト特集



<https://www.keinet.ne.jp/center/>



Part 1 2025年度共通テストの概要

POINT

- ✓ 2025年度共通テストに向けた試作問題が公表
- ✓ 問題構成、配点、時間割等の案も判明
- ✓ 分量の増加など、受験生の負担感に懸念

試作問題は理科を除く全教科で公表

2022年11月に、大学入試センターから、「令和7年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テストの出題教科・科目の出題方法等の予告」や、「令和7年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テストの出題教科・科目の問題作成方針に関する検討の方向性について」とともに、

新課程に対応した共通テスト試作問題も公表された。

今回、「理科」を除く全教科が提示され、出題教科・科目の配点等も明らかになった<資料1>。注目された『情報Ⅰ』が100点となったほか、『国語』では「近代以降の文章」「古文」「漢文」の内訳が変わる。

ここからは、今回公表された情報をもとに、各出題教科・科目について具体的に見ていく。

資料1 2025年度共通テストの出題教科・科目、ポイント、試験時間、配点など

教科	出題科目	経過措置 科目設定	ポイント	試験時間 (配点)	サンプル (R3.3)	試作問題 (R4.11)
国語	『国語』		- 試験時間が80分→90分へ - 近代以降の文章の大問が2→3に増加 - 配点が近代以降の文章(110点)、古文(45点)、漢文(45点)へ	90分(200点)		○
地理歴史 公民	『地理総合、歴史総合、公共』 『地理総合、地理探究』 『歴史総合、日本史探究』 『歴史総合、世界史探究』 『公共、倫理』 『公共、政治・経済』	○	6科目から最大2科目選択が可能(組合せに一部制約あり) 『地理総合、歴史総合、公共』は出題範囲から2つを選択	1科目選択 60分(100点) 2科目選択 130分 (うち解答時間120分)(200点)	○	○
数学	① 『数学Ⅰ、数学A』 『数学Ⅰ』	○	『数学Ⅰ、数学A』が全問必答に	70分(100点)		○
	② 『数学Ⅱ、数学B、数学C』	○	- 出題範囲に数学Cを追加 - 必答問題が2→3へ増加 - 選択問題解答数が2→3へ増加 - 試験時間が60分→70分へ	70分(100点)		○
理科	『物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎』 『物理』『化学』『生物』『地学』		- 基礎4科目を1科目として扱い、出題範囲から2つを選択 1つの時間帯で、最大2科目受験	1科目選択 60分(100点) 2科目選択 130分 (うち解答時間120分)(200点)		
外国語	『英語』『ドイツ語』 『フランス語』『中国語』 『韓国語』			【リーディング】80分(100点) 【リスニング】60分 (うち解答時間30分)(100点)		○ (英語のみ)
情報	『情報Ⅰ』	○	- 教科新設 - 試験時間は60分	60分(100点)	○	○

※赤字は今回新たに示された内容

※大学入試センター資料から河合塾で作成

各教科・科目の公表内容

国語

試験時間が80分から90分に延長される。

試作問題では、「言語活動の過程をより重視した問題」として、近代以降の文章を題材とした大問が1つ追加され、第3問の位置での出題が想定された問題が2パターン示された。

問題構成と配点は、第1問～第3問が、近代以降の文章を題材とした出題で110点（45、45、20点）、第4問と第5問が古典を題材とした出題で90点（古文45点、漢文45点）である。

地理歴史、公民

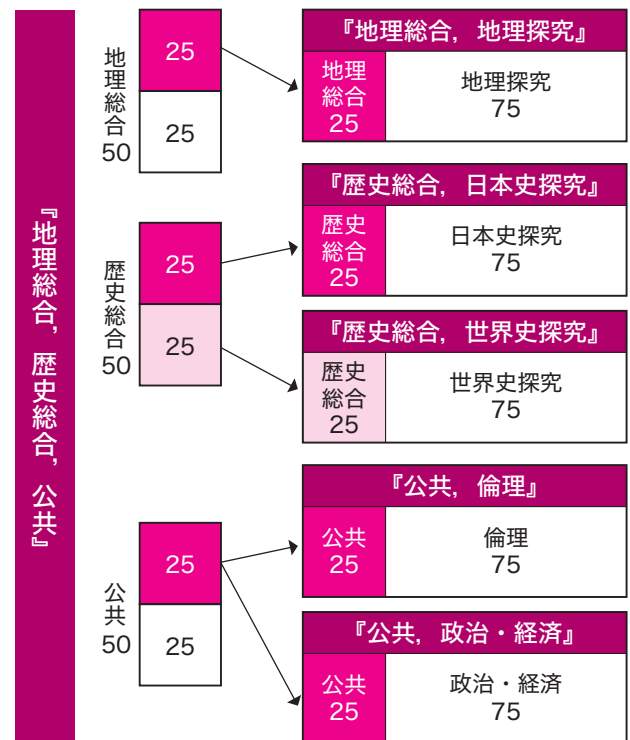
全6科目の配点と問題構成が示された＜資料2＞。

『地理総合、歴史総合、公共』は、「地理総合」「歴史総合」「公共」（各50点）から2つを選択して解答する。『地理総合、歴史総合、公共』の問題の一部は他科目と共通となっており、たとえば『地理総合、歴史総合、公共』と『地理総合、地理探究』では、「地理総合」の25点分が共通問題である。なお、『歴史総合、日本史探究』と『歴史総合、世界史探究』の「歴史総合」については、別の問題が出題されていることから、『歴史総合、日本史探究』と『歴史総合、世界史探究』の同時選択は認められている。

＜資料2＞の通り、科目間で共通の問題を利用するため、「地理歴史」「公民」から2科目を選択する場合、同時選択が不可能な組み合わせもあるので注意したい＜資料3＞。

資料3＞。たとえば『地理総合、歴史総合、公共』で「地理総合」と「歴史総合」を解答した場合、もう1科目は『公共、倫理』と『公共、政治・経済』のいずれかのみが選択可能である。

資料2 「地理歴史」「公民」の試作問題の構成



※→で結んだ部分は共通の問題。
※数字は配点を示す。
※今回の試作問題と同じ大問が共通問題になるとは限らない。

「地理総合」「歴史総合」「公共」の3つの中から、2つを選択して解答（50点×2＝100点）

※大学入試センター資料から河合塾で作成

資料3 『地理総合、歴史総合、公共』選択時の同時選択可能科目

	『地理総合、歴史総合、公共』		
	「地理総合」 「歴史総合」	「地理総合」 「公共」	「歴史総合」 「公共」
『地理総合、地理探究』	×	×	○
『歴史総合、日本史探究』	×	○	×
『歴史総合、世界史探究』	×	○	×
『公共、倫理』	○	×	×
『公共、政治・経済』	○	×	×

※○同時選択可 ×同時選択不可

※大学入試センター資料から河合塾で作成

数学

『数学Ⅰ，数学A』『数学Ⅱ，数学B，数学C』の試作問題で、新規に作成されたのはそれぞれ2問ずつで、残りは2021年度共通テスト本試験（1月17日実施）が使用されている。

『数学Ⅰ，数学A』は4問全問必答、『数学Ⅱ，数学B，数学C』は必答問題が3問で、選択問題は4問のうち3問を選択して解答する。試験時間については、『数学Ⅱ，数学B，数学C』が60分から70分に変更となり、数学①、②ともに70分となった。

英語

リーディング2問、リスニング1問の試作問題が公表された。リスニングについては、2021年度共通テスト本試験（1月16日実施）の問題をもとに、新学習指導要領の内容をより意識した問題となるよう、設問が修正（再構築）されていた。

情報

『情報Ⅰ』と経過措置科目の『旧情報（仮）』の試作問題が公表され、配点はともに100点だった。なお、『情報Ⅰ』の第4問のみ、「参考問題」として、もう1つ問題例が示された。

『旧情報（仮）』は、「社会と情報」および「情報の科学」に共通した必答問題2問とそれぞれ固有の内容に対

応した選択問題4問の計6問で構成されている。一部、『情報Ⅰ』で出題されたものと同一の問題が出題された。選択問題は4問から2問を選択し解答するが、高等学校での履修の有無に関係なく選択し解答できる。

時間割は2日目に大きな変更

＜資料4＞は、2023年度共通テストの時間割と、今回公表された、2025年度共通テストの時間割イメージを比較したものである。

1日目は、「国語」が80分から90分に変更になった。2日目は、数学②の時間延長、「情報」の新設によって変更点が多くなっている。「情報」は2日目の最後に実施される。「理科」は、理科①と理科②とで分けて行われているものを、1つの試験時間帯で実施し、終了時間は大きく後ろ倒しにならないように配慮されている。

旧課程履修者への対応も判明

経過措置科目は、「地理歴史」「公民」「数学」「情報」で出題される。旧課程履修者は、新課程科目と経過措置科目のいずれも選択することができる。教科により異なる課程を選択することも可能である。

また、経過措置科目も得点調整の対象となっている。なお、「情報」については、現行では得点調整の対象とならない、受験者1万人未満の場合も対象とする旨が公表された。

資料4 共通テスト時間割イメージ

2023年度			
1日目		2日目	
2科目受験 9:30～11:40	地理歴史 公民	9:30～10:30	理科①
1科目受験 10:40～11:40			
13:00～14:20	国語	11:20～12:30	数学①
15:10～16:30	外国語	13:50～14:50	数学②
17:10～18:10	リスニング	2科目受験 15:40～17:50	理科②
		1科目受験 16:50～17:50	

2025年度			
1日目		2日目	
2科目受験 9:30～11:40	地理歴史 公民	2科目受験 9:30～11:40	理科
1科目受験 10:40～11:40		1科目受験 10:40～11:40	
13:00～14:30	国語	13:00～14:10	数学①
15:20～16:40	外国語	15:00～16:10	数学②
17:20～18:20	リスニング	17:00～18:00	情報

※大学入試センター資料から河合塾で作成

資料5 2025年度共通テストに向けたスケジュール

スケジュール	主体	内容
2022年度中	各大学	大学入学共通テスト利用教科・科目の予告
2023年6月頃	文部科学省	「実施大綱」の公表 (これまで予告された出題教科・科目等を含む、試験の実施方針)
	大学入試センター	「出題教科・科目の出題方法及び問題作成方針」の公表 (今回示した予告・方向性を踏まえた正式決定)
2024年6月頃	大学入試センター	「実施要項」の公表 (出題方法、時間割など)
2025年1月頃	大学入試センター	2025年度共通テストの実施

※大学入試センター資料から河合塾で作成

2025年度共通テストについては
今後も検討が続く

＜資料5＞は、2025年度共通テストに向けた今後のスケジュールをまとめたものである。

今回公表された方針は、「令和5年6月(予定)の公表時には、問題冊子や解答用紙の形式等を踏まえ、本予告の表現をより適切なものに変える場合がありうる」とされており、今後も細かな点で検討・調整が続くと思われる。

また、今年度中(2023年3月まで)には、いわゆる2年前ルールに準じて各大学からの共通テスト利用教科・科目を含む2025年度入試の予告が公表される予定であるため、動向を注視したい。

今回の試作問題を受けて、どのような指導をしていくかが課題となってくるが、p12からの「試作問題分析」では、河合塾講師の分析、高校教員のコメントから、各教科・科目の試作問題の分析とそれを受けた今後の指導について見ていく。

科目全体のバランスを考慮した問題作成を

河合塾教育研究開発本部長 富沢弘和

共通テストの実施は、この1月で3年目を迎えた。複数資料の提示、日常や学習場面を中心に問題解決を題材とした出題、そして教科固有の「思考力、判断力、表現力」をより深く問うという問題傾向やコンセプトは継続しており、かつてのセンター試験との違いは鮮明になりつつある。

しかし、2022年度で大幅に平均点がダウンした数学では、各設問の難度が高かったことに加え、分量の増加も平均点低下の要因であった。共通テスト移行後、こうした分量の増加は、数学に限らず他の教科・科目でも同様に见られる傾向である。分量が多く、限られた時間の中で、すべて解答できない受験

生が増えてくるのであれば、共通テストにおいて問いたい資質・能力が問えているのかは疑問である。

今回の試作問題においても、あわせて示されている問題作成の方向性にのっとった作題であり、大学入試センターの苦心がうかがえるものとなっている。ただし、各々の設問でみれば問題の妥当性が感じられるものの、教科・科目によっては全体の分量が増していると感じられたものが見られ、試験時間が増えている科目もあることから、受験生の負担感が軽減される印象はない。大学入試センターには、問題作成にあたっては科目全体のバランスを考慮した検討を一考してほしい。

Part 2 試作問題分析

地理総合，地理探究

河合塾
監修 地歴・公民科講師
松本聡



問題作成の方向性、試作問題分析

今回の試作問題では『地理総合，地理探究』全6問中第3問以降の4問が「地理探究」からの出題であった。大学入試センターの「問題作成方針に関する検討の方向性」に「新学習指導要領の主旨に一層沿ったものとなるよう検討する」とある通り、今回の試作問題はこの問題作成方針を一層重視したものとなっており、特に第1問問1において明確なメッセージとして示されていた。この設問は、国の位置を地図上で明らかにせず、資料から位置情報を読み取らせた上で出題のテーマについて考察させるものであり、国の位置という基礎的な知識ですら思考力・判断力を測る素材とする意味で、象徴的であった。

分量・難易度

分量

増加

難易度

難化

2022年度共通テストの設問数は31問、試作問題は30問と1問減少しているが、質的な分量は増加している。それは、図（資料を含む）、表、写真において量の面での変化はわずかだが、質的な分量は明らかに増加してお

り、資料あたりの内容が充実した上で、総ページ数も増加していることから明白である。

難易度については、限られた時間内で解答していく上で確実に難しくなっているといえる。解答する上で、細かい知識の総量を単純に求めているわけではなく、複数の初見の資料を組み合わせることで正答に至る力を求め、さらに正答にたどりつくまでに時間がかかる問題であった。学生生活において絶対的に必要とされる本質的な力をも測ろうとする設問といえる。

特徴

第6問問3は、フードデザート（食の砂漠）をテーマに、同世代・同時入居が一般的であったニュータウン（新興住宅地）における、人口の高齢化による逃れられない問題（オールドタウン化）に気づかせたいという出題意図の奥に、地形改変などの高度成長期における、無機質な開発に対するアンチテーゼをあぶり出そうとする意思すら伺える設問である。これらは、新学習指導要領の目標の1つである「…地理的な課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」ことに沿った出題といえる。

問題構成

大問番号	分野	配点	設問数	テーマ
第1問※1	地理総合	12	4	難民問題とその解決策
第2問※2	地理総合	13	4	自然環境と防災
第3問	地理探究	17	5	気候システム、生態系（エコシステム）と人間社会
第4問	地理探究	17	5	国や地域の結びつき
第5問	地理探究	17	5	アフリカに関する地誌的考察
第6問	地理探究	24	7	現代世界の諸課題と、身近な地域における課題との相関・因果関係についての考察

※1『地理総合，歴史総合，公共』の中の「地理総合」第1問と共通。 ※2『地理総合，歴史総合，公共』の中の「地理総合」第2問と共通。

※配点は今回発表された配点。設問数は配点単位でカウント（以降の出題科目も同様）。

※河合塾による分析はWebサイトで全文を公開。河合塾では、主に2022年度までの共通テストと分量、難易度を比較。（以下、同）



専修大学松戸高等学校
泉貴久 先生

分量

多い

難易度

標準

設問数については、従来のセンター試験や共通テストと比較して少ないものの、資料がかなり多く、それを読み取り、理解するまでに相当な時間がかかるため、60分の中で解答することはかなり難しいものと考えます。

難易度については、「地理総合」「地理探究」の学習内容を逸脱することなく、基本的知識を組み合わせながら地理的概念を見出し、それを手掛かりに諸資料を分析・考察し、選択肢と照合させながら正誤を判断させる点において、新課程に相応しい標準的な問題と考えます。

今後の指導についてですが、これからの社会的変化の激しい時代において、物事を素早くかつ適切に理解し、課題解決に対応できる情報処理的なスキルが一層重視されると考えます。そうした力を担保するために、探究プロセス重視の授業を一層心掛けるとともに、共通テストへの「問題慣れ」のために、演習に充てる時間を多く設

定する必要があると感じます。また、地図や統計をはじめとするさまざまな資料（地理情報）の読み取りを手掛かりに、個別・集団での活動を伴った探究的な学びを一層重視していきたいです。「知識・技能」と「思考・判断・表現」を特に重視し、地理的な見方・考え方を駆使しながら地理的諸事象を分析することで、地理的概念や課題を見出し、それを手掛かりに課題解決、政策提言、社会参画を志向する学習プロセスを軸とした授業の開発をしたいと考えています。

ただ、時間数の制約の中、そうした学習プロセスを授業内で担保することが課題です。ゆえに、あるテーマを取り上げた学習の成果が、他のテーマの学習に「転移」できるよう、普遍性を伴う範例的な学びを構築する必要があります。このことがプロセス重視の学習の確立や「主体的に学ぶ態度」の育成につながるものと考えます。



東京都立三鷹中等教育学校
柴田祥彦 先生

分量

適切

難易度

標準

元々センター試験の地理は思考力を問う良質な問題でした。それが共通テスト試行問題では、リード文を無理やり難解にしたような不自然な問題が散見されましたが、今回それが減少した点は評価できます。また、既習の知識と提示された資料を組み合わせ考察して解答を導き出すスタイルも正常な形で進化しており、その点も評価できます。

共通テストに向けての指導については、センター試験からの流れが大きく変わっていないため、先生方の指導のスタイルも従来の路線を大きく変える必要はないと考えています。

ただ、先生方が作成する定期試験では、多くの資料を集め、適切な図化が求められる共通テストのような問題を作成するのは極めて負担が大きいため、定期試験と共通テストの問題との質的な差が拡大してしまうことへの

不安があります。たとえば「地理探究」の解答番号10番の海岸段丘の問題は実に素晴らしい問題だと思いますが、このレベルの問題作成を忙しい仕事の合間に作成することは無理でしょう。

また、「地理探究」の解答番号19番は、乾燥指数という用語がほとんどの受験生にとって初見のものであり、その概念等を理解する点が難しいのではないかと感じました。

「地理総合」の解答番号7番の問題は、Web-GISである地理院地図を使わなければ見られない「自然災害伝承碑」を扱ったものでした。これは、手間を惜しまずに一人一台のPCを活用して地理院地図などのWeb-GISを活用してほしいという、高校現場に対する大学入試センター側からのメッセージであろうと感じました。

歴史総合，日本史探究

河合塾
監修 地歴・公民科講師
平野岳美



問題作成の方向性、試作問題分析

『地理歴史』の問題作成方針に関する検討の方向性」では、「新学習指導要領に示されている、それぞれの科目で育成することとされている資質・能力を一層重視したものとなるよう検討する」とされており、実際の試作問題は新学習指導要領にもとづいた出題であり、歴史総合部分は2021年3月に発表されたサンプル問題の延長線上にあるといえる問題であった。

『歴史総合，日本史探究』の作成方針の方向性は現行の「日本史B」の共通テスト作成方針を継承しており、試作問題も思考力・判断力を問う姿勢を重視している。

資料（史料・図版・グラフなど）が多用され、知識だけでは解けない一方、資料の読み取りだけでも解けず、知識と技能のバランス、および、思考力・判断力とのバランスが取れた問題となっている。

分量・難易度

分量

やや増加

難易度

変化なし

全体の大問数は6問で現行の共通テストと同じだが、設問数は現行の共通テストが32問、試作問題は34問と

微増した。一方、全体のページ数は、現行の共通テストが2021・2022年度とも31ページだったのに対し、試作問題は39ページあり、大幅に増加している。設問文が長いものが多いのに加え、資料の掲載量が増加しているためである。結果として、設問数はさほど変わっていないが、受験生が解答に要する時間は増加すると考えられる。ただし、問題そのものの難易度は現行の共通テストとそれほど変わらない。「歴史総合」部分については、サンプル問題の難易度とそれほど変わらない。

特徴

第1問が「歴史総合」からの出題で、配点は25点(全体の1/4)であった。

全大問が大学生や高校生が登場する設定になっており、新学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学びを実現する」ことを意識した出題になっている。

資料を用いた設問が多く、全体に思考力・判断力を問う姿勢が見られるとともに、知識・技能とのバランスも考慮されている。

時間認識・空間認識を意識した問題が多く、時代概観をつかんでいるかどうか問われている。

問題構成

大問番号	分野	配点	設問数	テーマ
第1問※	歴史総合	25	9	人やモノの移動とその影響
第2問	日本史探究	15	5	総合 学びの歴史
第3問	日本史探究	15	5	古代 藤原京の時代の特徴
第4問	日本史探究	15	5	中世 中世社会における対立・紛争の解決方法
第5問	日本史探究	15	5	近世 江戸時代の政治・社会（大坂）
第6問	日本史探究	15	5	近現代 関東地方のある市の近現代史

※『地理総合，歴史総合，公共』の中の「歴史総合」第1問と共通。



筑波大学附属高等学校
大庭大輝 先生

分量

やや多い

難易度

標準

第2問の問4などのように、やや細かな知識や生徒が苦手とする分野からの出題はありますが、おおむね資料の読解や基礎的な知識で解答可能だと感じました。

一方、リード文や資料などに解法上の根拠を求める出題が多く、じっくり取り組まないと見逃す恐れがあり、かなり時間を取られると思います。

日頃の授業でより一層多くの資料に触れる機会を作っていく必要がありそうです。定番の資料にとどまらず、生徒にとって初見の資料、絵画や写真など異なる種類の資料を授業内で扱うことで、歴史とは日常的に資料に触れる科目だと生徒に意識させることが大切だと考えます。

一方、「歴史総合」と一緒に出題されたことで、主題を設定する学習を念頭に作られたと思われる第2問を除くと、「日本史探究」の近現代史単独の大問は第6問に限定されています。受験への対応という意味においては、

教科書上は分量が膨大でかつ細かな事象も多く扱う近現代史の学習について、歴史総合との「被り」も考慮しつつ、授業でどのように、どの程度まで詳しくかつ時間をかけて扱うかは非常に難しい判断となると感じました。

全体を通して、探究的な授業を促すメッセージを強く感じました。また、近現代史の出題は「歴史総合」との差別化が意識され、「明治維新」の定義など歴史概念の評価や画期の表現といった新科目の趣旨を反映したものもありました。しかし、それが解法自体には大きく影響を与えていない点などには課題も残っていると感じています。

今後は、基礎知識を問う問題、思考を要する問題、資料を読み取る問題に加え、歴史事象を評価させるような問題を盛り込みうるか、また盛り込むべきかなどが問われてくると思われます。



昌平高等学校
堀越直樹 先生

分量

やや多い

難易度

標準

現行の共通テストや『歴史総合』のサンプル問題(2021年3月)と比べて、難易度に大きな変化はなく、丁寧に資料を読解し、教科書中心の学習で得た知識を生かしながら考えれば解答にたどりつけます。

ただし、分量は明らかに増加しており、設問数は現行の共通テストの32問から34問に増えました。ページ数は2021年度・2022年度の共通テストがともに31ページだったのに対し、試作問題では39ページあり、かなり増加しています。問題作成方針として、探究的に学んだり協働的に課題に取り組んだりする過程が重視されているため、社会や日常の中から課題を発見し解決方法を構想する場面などが設定されていることがページ数増加の要因と考えられます。

「歴史総合」については、サンプル問題においても、今回の試作問題においても、世界史分野の細かい用語の

知識は求められていません。そのため、「歴史総合」の授業では、細かい用語の知識などを網羅的に学習するような方法は優先させず、学習指導要領に従い、概念的理解、時代の特徴の把握、「問い」に対する考察などを重視していきたいです。

「日本史探究」の授業では、「歴史総合」の授業で意識したものを継続しつつ、さらに知識量を増やしながら考察を深めていきたいです。一問一答型の用語暗記に依存せず、歴史事象の因果関係の理解や、時代の特徴の把握を重視することがこれまで以上に必要だと感じています。また、史料・図版・グラフを読解する機会を、普段の授業、定期考査の中で意識して増やしていきたいです。

指導上不安な点はないです。今回の変化に対し、学校内外の先生方と情報交換しながら試行錯誤することがとても楽しいと感じています。

歴史総合，世界史探究

河合塾
監修 地歴・公民科講師
坂本新一



問題作成の方向性、試作問題分析

新学習指導要領に沿って、生徒の主体的活動をテーマとした問題が多い。資料（史料・図版・グラフ・表など）が多用され、それらを読み解く技能と習得した知識を結びつけることが求められている。

『歴史総合、世界史探究』全5題中1題が「歴史総合」からで、配点は100点満点中の25点（1/4）となっている。

全5題中4題が「世界史探究」からで、配点は100点満点中の75点（3/4）。新学習指導要領にもとづき、現行の共通テスト「世界史B」より、いっそう思考力・判断力を問う傾向が強まっている。

分量・難易度

分量

変化なし

難易度

変化なし

※時間的負担増

2022年度の共通テスト本試験（「世界史B」）と比較すると、難易度は大きく変わらない。ただ、固有名詞ではなく内容や歴史的概念を問う傾向がさらに顕著となった。分量としては、本試験の小問数34問に対し、試作

問題は33問。ただし、共通テストの28ページに対して、試作問題は40ページにわたる。資料（史料・図版・グラフ・表など）の読み取りがいっそう必要とされるため、問題数はほぼ同数でも時間的負担は大きくなるだろう。「歴史総合」と「世界史探究」の比率は、得点で1：3（25点：75点）。問題数もほぼ同様に、「歴史総合」の小問数が9問、「世界史探究」が24問となっている。

特徴

新学習指導要領が掲げた「知識及び技能」「思考力、判断力」「学びに向かう力」などの習得度を確認する試験となっている。

固有名詞を問うのではなく内容や歴史的概念を問おうとする傾向が顕著であり、たとえば第1問・問1（1）では、語句や年号を知らなくても解答できる一方、内容や因果関係を踏まえた時間軸の理解が必須である。空間軸の理解も求められ、第3問・問5（18）では、ある時代の国際情勢の理解を前提に、生徒の会話や複数の図法の地図を読み解き、航路を地図上で答えさせる。複数資料の相違点や類似点を比較・検討して判断する力も必要であり、第2問・問4（13）では複数の都市の地図などから考察を深め、生徒たちの分類基準を推測させる。

問題構成

大問番号	分野	配点	設問数	テーマ
第1問※	歴史総合	25	9	世界の諸地域における人々の接触と他者意識についての授業
第2問	世界史探究	13	4	世界史上の都市についての授業
第3問	世界史探究	15	5	外交や貿易などによって発生する人の移動と移動ルートを選択についての授業
第4問	世界史探究	25	8	世界の諸地域における国家と宗教の関係に関する資料
第5問	世界史探究	22	7	ある主題について生徒が考察を行う授業（※主題そのものが解答として問われている）

※「地理総合，歴史総合，公共」の中の「歴史総合」第2問と共通。



東京都立青山高等学校
角田展子 先生

分量 やや少ない

難易度 やや難しい

分量は、世界史学習の集大成と考えると33問はやや少ないのではないのでしょうか。現行の共通テスト「世界史B」も2019年までは36問だったことを考えると、もう少し多くてもよいのではないかと感じました。

難易度に関しては、複数の資料を読み込むなど、解答に導くまでの手順に時間がかかり、複雑な思考を要する問題が多いため、やや難しいのではと判断しました。

今後の指導で取り組みたいこととしては、初見の資料やデータが出たときに焦らないように見方のポイントを指導することです。また、今回の「政教分離」などの概念理解の指導も用語として覚えるのではなく、歴史的背景や意義を理解させるということが必要だと感じました。

一方、不安な点でいうと、教員が指導できる資料には限界もあり、風刺画などはその意図を正しく理解しているか、教える側としても不安です。ただ、「歴史総合」

の部分での日本史的内容についてはおおむね想定内で、これに関する不安は払拭されました。

出題範囲については、近代欧米政治史（いわゆるフランス革命や一次大戦、戦間期など）からの出題が少なかった印象です。アジア中心の交易・交流史が多く、「世界史探究」の問題としては、分野の偏りが気になりました。

また、問題形式については、無理に会話文にしなくてもよいのではと感じました。特に第1問はかなり無理があったのではと思います。

今回の出題傾向が続くのであれば、分量が少ないこともあり、資料問題などを準備してきた学力の高い層はかなり高得点を取れる一方、暗記中心の学習をしてきた層にとっては難易度が高く、二極化が進むのではないかと考えられます。



愛知県立大府高等学校
野々山新 先生

分量 多い

難易度 標準

問題のページ数が増加していることから明らかですが、情報量は非常に多くなっています。各設問に取り組む際にも、与えられた資料やリード文の文脈を意識する必要があるため、生徒にかかる負担は高くなりました。

一方で難易度については、これまでの試行問題や現行の共通テストと大きく変わっていません。「歴史総合」の部分では、単純に事実に知識を問う設問もありましたが、おおむね近現代の歴史の概念的な理解が重視されており、内容精選の意図を感じます。加えて、解答の導出には資料の解釈に取り組む思考力・判断力が必要でした。こうした知識と思考を有機的に結合させた出題の方向性は、学習指導要領の理念とも一致していると考えています。この傾向は、「世界史探究」でも同様でした。

今後の指導については、「歴史総合」ですべての大項目を射程とした問題が構成されていること、「世界史探究」も含めたすべての大問で設定された主題の考察を進

める思考プロセスが内在化された出題がなされていることの2点を意識したいと考えています。

前者については、2単位の「歴史総合」では教科書の全ページを網羅的に扱うのではなく、概念に着目しながら焦点化した学習計画をデザインすることを心がけたいです。後者については、これまでの国別、時代別、分野別といった分類による授業構成を改め、主題を設定しながら問いと資料を中心とした単元の構成を明確にしていきたいと考えています。「歴史総合」の授業実践から断絶することなく、「世界史探究」でも単元を意識して歴史学習を深めていく学び方が大切になるでしょう。

しかし、「歴史総合」と「世界史探究」の授業担当者が異なる可能性もあり、この点に関しては不安が残ります。連続性を担保するには教科内連携が重要となってくるため、授業のデザインを校内で対話的に深めていく機会を一層増やしていくべきではないかと感じています。

公民

監修

河合塾
地歴・公民科講師
吉見直倫

『公共，倫理』

分量

増加

難易度

変化なし

生徒や先生が対話し思索を深めていくという場面設定は、現行の共通テストの「倫理」や「現代社会」と同様である。また、各種資料（原典、図版など）や会話文などから読み取った内容を手がかりとして判断させる設問を設けている点や、倫理に関する概念や理論を手がかりとして多面的・多角的に考察、構想できるかを試す設問を出題している点も、現行の共通テストと同様である。

「公共」部分については現行の共通テスト「現代社会」と、「倫理」部分については現行の共通テスト「倫理」と、それぞれ同程度の難易度であると考え。難易度の高い設問と低い設問の両方が扱われており、全体として見ると、大きく難易度は変わらないといえよう。

全体のマーク数は現行の共通テスト「倫理」と同数であったが、試作問題『公共，倫理』の全体ページ数は2021・2022年度の共通テスト「倫理」よりも7ページ増加しており、全体の分量および1設問あたりの分量は増加しているといえよう。試験問題すべてを解答するには、現行の共通テスト「倫理」よりも多くの時間を要するようになったといえるだろう。

『公共，政治・経済』

分量

増加

難易度

変化なし

あるテーマについて、クラス内で探究学習を進めるといった場面設定や、生徒や先生が対話し思索を深めていくという場面設定は、現行の共通テストの「政治・経済」や「現代社会」と同様である。また、教科書に掲載されている知識の定着度合いを確認する設問のみならず、資料から適切に情報を読み取る技能を試す設問や、現代の日本や国際社会において生じている諸問題の原因を追究し、その解決策の構想に向けて考察できるかを確認する設問なども出題されている。

「公共」部分については現行の共通テスト「現代社会」と、「政治・経済」部分については現行の共通テスト「政治・経済」と、それぞれ同程度の難易度であると考え。

全設問（32問）のうち、「公共」部分が8問（25%）を、「政治・経済」部分が24問（75%）を占めている。配点についても「公共：政治・経済」の比は「1：3」となり、「政治・経済」部分に重きが置かれる形となった。全体のマーク数は、現行の共通テスト「政治・経済」と比べ3～4程度増加しており、全体のページ数も増加している。試験問題すべてを解答するには、現行の共通テスト「政治・経済」よりも多くの時間を要するようになったといえるだろう。

問題構成

『公共，倫理』

大問番号	分野	配点	設問数
第1問※1	公共	13	4
第2問※2	公共	12	4
第3問	倫理	28	9
第4問	倫理	15	5
第5問	倫理	16	5
第6問	倫理	16	5

『公共，政治・経済』

大問番号	分野	配点	設問数
第1問※1	公共	13	4
第2問※2	公共	12	4
第3問	政治・経済	18	6
第4問	政治・経済	18	6
第5問	政治・経済	19	6
第6問	政治・経済	20	6

※1『地理総合，歴史総合，公共』の中の「公共」第1問と共通。 ※2『地理総合，歴史総合，公共』の中の「公共」第4問と共通。



千葉県立東葛飾高等学校
内久根直樹 先生

分量

やや多い

難易度

標準

※「公共」部分

『地理総合，歴史総合，公共』の「公共」部分は、サンプル問題（2021年3月）と比べて、マーク数は11から16、大問数は3から4になっています。

以前検討されていた、答えが複数あり得る「連動型」は「公共」の試作問題では出題されませんでした。

選択肢については、「でないものを1つ選ぶ」がなくなりました。これまで、受験生のより高い注意力を測るために設けられていた出題文だったと考えられますが、発展的に解消されたと推測できます。すでに導入されている「当てはまる事例はない」を含むものが、難易度の高さを感じるものになるでしょう。

リード文については、現代社会では設問に関係する下線部のみを読めばよい、といった評価がされる傾向もありましたが、試作問題「公共」では、テーマに関係する生徒同士の会話や授業における資料をもとに場面設定され、問題に導く(lead)文に改善されている点はとても

良いと感じました。

また、試作問題を見て、「思考」と「反射」の高次の融合が求められているのではないかと考えました。思考については、「多様性／共通性」「ロードプライシング」などの聞き慣れない単語や概念、少子化対策に関連した見慣れない図表が取り上げられました。ただ、教科書で取り扱われているアプローチや、SDGsを軸とした持続可能な社会に向けたアプローチを援用して思考することで、納得解を得られるものになっています。教科書の内容はもちろんですが、教科書「から」粘り強く考える生徒を育てる方向性が授業実践者に求められるでしょう。

また、思考する（問に向き合う）時間の確保のために、反射的に即答することも必要だと考えます。基礎的な知識は不可欠なため、たとえば、哲学者とその主張を一言で説明する用語との対応だけでなく、なぜその主張を展開したのかなどもおさえることが求められます。



大阪府立三国丘高等学校
大塚雅之 先生

分量

適切

難易度

標準

分量に関しては、『公共、政治・経済』は大問6つの34問（マーク数）で、2022年度共通テストの「政治・経済」は30問なので、増加しています。『公共、倫理』は大問6つの33問で、2022年度共通テストの「倫理」が33問のため、同じです。

ただし、高校生にはなじみのない資料を読み取らせる問題や、3つの統計データを読み取り、「適当でないもの」の組み合わせを選ばせるという、複雑な作業が要求される問題があり、一つ一つの問題には時間がかかると考えられます。

『公共，政治・経済』『公共，倫理』ともに、細かな知識について問う設問はなく、これまでの共通テストとさほど変わらなかったです。

総合的に見て、分量・難易度については標準の域内といえるかもしれませんが。しかし、初見の資料を読ませるものが多く、この形式が続けば対策が難しいと考えられ、

受験生への負担が増すことが予想されます。

今回の試作問題では、データや資料について考えさせる問いが多かったですが、こうした問題の対策をするには、ただ知識を教えるだけでは難しいです。しっかりとデータや資料を読ませて、分析させ、どのようなことができるかを議論させる授業を行っていく必要があると考えます。このような作業を普段から行うことで、読解力やデータを読み取る力、知識を関連づける思考力を養っていくことができるでしょう。また、定期考査においても、生徒にとって初見の資料を取り上げていく必要があると考えます。

データや資料を収集し、そこからどのようなことがいえるのか、もしくはいえないのかをきちんと考察していく力は、大学入試に限らず、社会で求められるものであると感じます。今回の試作問題は、より社会で求められる力を測る問題であったと受け止めています。

数学

監修

河合塾
数学科講師
福眞剛司

『数学Ⅰ，数学A』

分量

増加

試作問題は、「問題作成方針に関する検討の方向性」の通り、**全問を解答させる**テストである。試験時間は現行と変わらない。一部に2021年度共通テスト第1日程の問題が用いられているが、新規で2問作られた。

過去（2006～2015年）、「数学Ⅰ・数学A」が全問必答だったときには、「図形と計量」と「図形の性質」が融合されて出題されていた。今回はそのような出題はなかったが、今後は、「図形と計量」の分野では「思考力を問う問題」と「融合問題型の問題」が分題として出題される可能性もあるだろう。

分量は、第4問の文章量が多く（行数で例年の2倍程度）、全体としては多い。新学習指導要領で新しく示された、「外れ値」、「仮説検定の考え」、「期待値」の問題が出題されたが、これらは、数学の思考過程を重視する、難易度が高めの問題が多かった。

『数学Ⅱ，数学B，数学C』

分量

増加

試作問題は、「問題作成方針に関する検討の方向性」の通り、「数学Ⅱ」は選択問題を含まず、**「数学B」「数学C」は4問から3問を選択する**。解答すべき問題数が増えたことにより、**試験時間は現行より10分増えて70分**となった。一部に2021年度共通テスト第1日程の問題が用いられているが、新規に2問作られた。

「数学Ⅱ」部分の配点比は現行の共通テスト「数学Ⅱ・数学B」より少ない。今回は出題されていないが、年度によっては「図形と方程式」や「いろいろな式」が出題される可能性がある。

分量・難易度については、第5問、第7問の行数が多いので（他の問題の1.5～2倍程度）、読むべき文章量は増加した。解答時間は10分増えているが、新規の問題は思考力を要し、難易度が高めに設定されているものが

あり、多くの受験生にとって70分で解答することは厳しいだろう。

ただし、『数学Ⅰ，数学A』のテストも同様だが、これまでの試行テスト、試作問題、試行調査においては、その分量と難易度がそのまま本番に引き継がれないことが多かったので、今回の分量と難易度は必ずしも参考にならないことには注意が必要である。

問題構成

『数学Ⅰ，数学A』

大問番号	分野	配点	設問数
第1問〔1〕	数学Ⅰ 数と式、2次関数	10	5
第1問〔2〕	数学Ⅰ 図形と計量	20	11
第2問〔1〕	数学Ⅰ 2次関数	15	6
第2問〔2〕	数学Ⅰ データの分析★	15	6
第3問	数学A 図形の性質	20	10
第4問	数学A 場合の数と確率★	20	8

『数学Ⅱ，数学B，数学C』

大問番号	分野	配点	設問数
第1問	数学Ⅱ 三角関数	15	9
第2問	数学Ⅱ 指数関数・対数関数	15	10
第3問	数学Ⅱ 微分・積分の考え	22	10
第4問	数学B 数列	16	10
第5問	数学B 統計的な推測★	16	9
第6問	数学C ベクトル	16	6
第7問	数学C 平面上の曲線と複素数平面★	16	6

※★の問題は新規作成。それ以外は2021年度共通テスト第1日程で出題された問題を用いている。

※『数学Ⅰ，数学A』は全問必答、『数学Ⅱ，数学B，数学C』は赤枠の部分から3問選択。



神奈川県立湘南高等学校
池上新悟 先生

分量 I,A:多い II,B,C:多い

難易度 I,A:やや難しい II,B,C:難しい

『数学Ⅰ，数学A』（以下、『Ⅰ，A』）の第2問〔2〕は、仮説検定がとても簡単でしたが、データの分析だけで10分程度かかってしまうと見られ、時間が足りなくなるでしょう。第4問は設定の理解に時間がかかりそうではありますが、計算量は軽く、この程度の計算量にとどめていただけることが望ましいと感じました。

『数学Ⅱ，数学B，数学C』（以下、『Ⅱ，B，C』）は、必答3問、選択3問はあまりにも分野数が多いと感じました。各問に10分程度しか使えないことを考えると、分量は非常に多いです。全体を通して、難易度、分量ともに、難しすぎるし多すぎると感じました。このままだと40点程度の平均点になるのではと予想しています。

『Ⅰ，A』では、確率において定義に従った表記をしていきたいです。確率は数字のみを書いて指導しがちなので、正しい表記で議論を進めていきたいと考えています。

共通テストの問題は、教科書にある基本的事項をしっかり理解した上で、新たな設定の問題を考えさせられる問題が多いため、1、2年次では教科書にある基本的事項の理解に重きを置き、3年次で基本的事項を活用する訓練を積みたいと考えています。

『Ⅱ，B，C』については、計6分野解くというのはあまりに多すぎるため、特に文系の生徒に対する指導が不安です。学ばなければならない内容・分野が多すぎて、カリキュラムに入りきりません。このままでは国公立文系志望者が減ってしまう可能性すらあると感じました。湘南高校では、文系生に対しても試作問題選択部分の4分野すべてを扱う予定ですが、「平面上の曲線と複素数平面」は、文系生にとっては学習時間が足りないため、文系生は「数列」「ベクトル」「統計的な推測」に絞って学ぶ、という選択をする学校があるかもしれません。



広島市立舟入高等学校
吉田浩一 先生

分量 I,A:やや多い II,B,C:やや多い

難易度 I,A:標準 II,B,C:やや難しい

試作問題『数学Ⅰ，数学A』（以下、試作問題ⅠA）は、2022年度共通テスト「数学Ⅰ・A」（以下、22共テⅠA）をどうしても意識してしまう分、取り組みやすいという印象を受けます。ただ、文章量も多く、すべての問題に対して、誘導に沿って立ち止まることなく最後の設問までたどりつくことは難しいように思います。

試作問題『数学Ⅱ，数学B，数学C』（以下、試作問題ⅡBC）では、2つの選択問題「平面上の曲線と複素数平面」（以下、複素数平面）、および「統計的な推測」（以下、統計）が初めて示されました。複素数平面は、いわゆる定番問題のドリル演習では正解にたどりつけない一歩踏み込んだ内容となっています。一方、統計は標準的であり、仮説検定についても親切で素直な問いかけであるように思います。

今後の指導についてですが、「試作問題ⅠA」は、出

題者の若干の配慮がうかがえるものの、現場は「22共テⅠA」を意識せざるを得ません。今後も同様の出題が続くものと受け止め、タフな生徒を育てるための教育を実践していくしかないと思います。

「試作問題ⅡBC」の統計については、配慮のある出題ではあるものの、指導者はまず専門書を読み返すことから始めるべきではないかと思っています。この單元もいずれHOWでは通用なくなると覚悟しています。質の高い授業を提供するための準備を始めていきたいと思っています。複素数平面は、学ぶほどに面白さを味わうことができる單元と思っています。單元を終えた後の指導者の「語り」によって、生徒たちの思考の旅が始まると信じます。これまで同様、結果にたどりつくまでの過程を大切に、結果を俯瞰することを忘れず、数学的思考を巡らせることを大切にしたいと思っています。

英語

監修

河合塾
英語科講師
小森清久

問題作成の方向性、試作問題分析

問題作成の方向性に変更はない。「英語コミュニケーションⅠ」、「英語コミュニケーションⅡ」、「論理・表現Ⅰ」を範囲とし、問題冊子、マークシート式解答用紙、およびリスニングではICプレーヤーを使用する方式で実施され、**リーディングとリスニングの2技能を測定する試験で継続すること**が示されている。また、リスニングでは多様な話者による現代の標準的な英語で、「当面は1回読みと2回読みの両方の問題を含む構成で行う」という方針にも変化はない。なお、**ライティング、スピーキングに関し、英語を記述したり、英語の音声を吹き込んだりする直接的な方式での試験は実施しない**方向性が試作問題によっても裏付けられたといえる。

リーディング

分量

増加

難易度

やや難化

今回の試作問題では、2022年1月実施の本試験と対応する大問番号を設定できないため、以下の内容から、難易度はやや難化、分量は増加と判断した。

第A問は、ある主題に関して賛否の意見を述べる際、複数の文章を読み、その主張をまとめ、論拠を整理する場面を想定している。

第B問は、英語の授業で書いた文章を教師からのアド

バイスに従って推敲する場面を想定し、段落のトピックセンテンスや全体の要約になる文、文脈上補う必要がある文、文と文の意味関係を表す語句などを選択する問題となっている。

第A問は総語数が1,328語で、2022年1月実施の本試験のなかで最長の第6問B（1,042語）と比較して290語ほど多い（語数は河合塾調べ）。

リスニング

分量

変化なし

難易度

変化なし

今回の試作問題では、2021年度共通テスト本試験の第5問をベースとして、問32と問33を修正（「再構築」）した形で提示された。試作問題では2人の短い発話を聴き、その発言内容が講義の内容と一致しているかどうかを、日本語で書かれた4つの選択肢から1つ選ぶ形式に変更されている。このことにより英文を読み取る労力が軽減され、取り組みやすくなっているともいえるが、2人の短い発話を音声で聴き取ることが求められているため、難易度の変化はないといっていよう。

なお、センター試験も含めてこれまで選択肢が日本語で出題されたことはなかったため、実際に今回の形式での出題が行われる際には、選択肢は英語に変更される可能性がある。

問題構成

大問番号	形式区分	配点	設問数	テーマ
第A問 (リーディング)	読解問題	18	5	授業中における生徒のスマートフォン使用の是非
第B問 (リーディング)	読解問題	12	4	環境に配慮したファッション（サステナブルファッション）
第C問 (リスニング)	モノログ型長文ワークシート完成・選択問題	15	7	「幸福感」（2012年国連「世界幸福度調査報告」より）



埼玉県立浦和高等学校
岡田稔 先生

分量 リーディング:適切 リスニング:適切

難易度 リーディング:標準 リスニング:やや難しい

リーディングの第A問は、複数の文章やグラフと、読んだ内容を照合したり、数字の書き換えを考えたりするなど、手続きに時間がかかるため、やや難しいとしました。一方、第B問は添削の形式をとってはいますが、文脈の流れを読み取り、文章を抽象化して選択肢から正解を見つけるなど、従来の問題とあまり変わらないと考え、標準としました。

リスニングは、1回で聴き取り、答えるには「音声の認識」「内容理解」「情報の保持」と同時に、選択肢を「読み」「判断する」必要があるため、かなりの負担があると思いました。また、使われている英語は標準的ですが、ワークシートの「構成の理解」に手間取る生徒が多くなると思い、やや難しいとしました。

リーディング指導については、1、2年生のうちに基本的な語彙と基本表現の習得を授業内外で行い、精読だ

けに偏らず、教科書レベルの文章を速読し、読んだ内容を「記憶に保持しながら」「問いを考える」機会を多くとりたいと考えています。また、読んだ内容をスピーキングでリテリングすることで、「ストーリーやプロット」を自ら再構築できるような練習を行うのも効果的だと考えています。

リスニングは、即時性が高く、心理的なプレッシャーのかかる試験だと思います。まずはオーセンティックな教材を使い、聴き取りにくい音にも対応できる力をつける機会を設けることで、心理的負担が下がればと思っています。その上で、流れてきた英文の筋書きや数字の情報、因果関係をつかみ、情報を保持しながら、問いを考える機会を多くとりたいと考えています。最終的には、「内容に焦点を置き」理解するという態度を育てたいと考えています。



東京都立千早高等学校
中村隆道 先生

分量 リーディング: やや多い リスニング: 適切

難易度 リーディング: やや難しい リスニング: 標準

2022年度共通テストと比べ、リーディングの分量は、語数や資料の増加から判断するとやや多いです。難易度は、第B間にあるように、「書く力」など求められる力の質的变化があるため、上がっていると考えました。「論理的な英文を書く」という視点が含まれていることは新しい傾向の特徴といえます。

リスニングは、求められている「聞く力」に大きな変化はなかったです。ただし、問32にあるように、これまでは文字要素、すなわち読解力で内容理解が求められていた問題が、放送された英文、すなわち聴解力で求められる、という傾向の変化があります。英語を使用する場面がより想定されたものとなっており、英語のインプット活動の重要性は増しているといえます。

リーディングの出題傾向として、より「日々の授業」を想起させる内容が見られるため、授業においてより豊

かな言語活動を行うことが課題と考えています。ペアワークはもとよりグループワーク、プレゼンテーションやディベート等によって、さまざまな意見を整理する活動を行うことが必要です。また、「書く力」も問われるため、生徒に書く機会を確実に与えることも必要です。

リスニングの出題傾向についても、実際のコミュニケーションの場面が想定されたものであり、英語での発表ややりとりなど豊かな言語活動を行うことが必要になってきます。また、話者が伝えようとしていることや問題で問われる内容をある程度“infer（類推する）”力が求められています。可能な限り、実際の言語使用の場面を設定し、同傾向の問題に習熟させたいです。

従来の対策で乗り切れる部分を探すだけではなく、発想を転換し、授業での言語活動を充実させることで生徒が必要な力を身につけることができると考えています。

国語

監修

河合塾
国語科講師
福永寿美子

問題作成の方向性、試作問題分析

従来の問題作成方針を引き継ぎつつ、新学習指導要領における「現代の国語」に対応した大問が1つ追加される<問題構成>。今回の試作問題では、追加部分への出題を想定した問題が2題公表された。なお大問数の増加に伴い、**試験時間も80分から90分に変更**される。

現代文に関しては、第1問は論理的な文章から、第2問は文学的な文章から出題されるという従来の傾向を引き継ぎつつ、新しく追加される第3問では、現代の社会生活と関わる題材について、文章を読み取るだけでなく、それを図やグラフなどと関連づけながら解釈したり検討したりするという、言語活動の場面を設定した問題となることが予想される。

分量

分量

増加

現行の共通テストが大問4つであるのに対し、大問が5つとなり、第1問から第3問が近代以降の文章、第4問が古文、第5問が漢文となる。新しく追加される第3問について今回の試作問題では、複数の1ページ弱の文章と図・グラフなどが出題されている。現行の共通テストの第1問や第2問と比べ、一つ一つの文章は短い、

図やグラフの数が多い。解答数は5で現行の大問の約半数である。第3問は、解き慣れていないと手間取ることが予想される。

特徴

従来のセンター試験や共通テストでは出題されなかった形式の大問が1つ追加される。新しく追加される第3問では、現代の社会生活に必要とされる論理的な文章および実用的な文章からの出題となり、文章の読み取りだけでなく、図やグラフなどを的確に読み取ったり、複数の文章や資料を関連づけて解釈したり、それについて分析し検討したりするといった言語活動の過程を重視した問題になるだろう。

学習対策

現行の共通テストやセンター試験の過去問を使って演習することは有効であると考えられる。ただし、新しく追加される第3問については、新学習指導要領における「現代の国語」で学習する、資料の読み取りや、それをもとに言語活動をする力が求められる。文章の読解だけでなく、図やグラフを正確に読み取る力やそれらを関連づけて解釈する力を養っておくことが必要となる。また、現代社会の問題についてレポートを書くなどといった言語活動に触れておくことも必要になる。

問題構成

大問番号	分野	配点	設問数
第1問	近代以降の文章	45	
第2問	近代以降の文章	45	
第3問	近代以降の文章	20	5
第4問	古典（古文）	45	
第5問	古典（漢文）	45	

●「第A問」「第B問」の2種類の試作問題が公表

- ・第A問
気候変動と人間の健康についてのレポートを作成する言語活動
- ・第B問
日本語独特の言葉遣いに関するレポートを作成する言語活動



京都府立洛北高等学校
戸田智和 先生

分量

多い

難易度

標準

「現代の国語」「言語文化」での対応

難しい

難易度そのものは標準的ですが、複数の資料から必要な情報を読み取って正解を導くには時間がかかります。第B問は文字資料が多く、現行の選択問題とそれほどの差はないものの、第A問については特に図やグラフが多く、読み取れる情報量が多いため苦勞するでしょう。全体として、配点に比して情報量が多すぎると感じました。

「現代の国語」では、実用的な文章に加えて図やグラフを扱うとはいえ、それらは表現や発表の場面に多く登場するものであり、図やグラフの読み取りを数多く行うことは想定されていないため、試作問題（第A問）に必要な能力の養成は難しいと思われます。「言語文化」の標準2単位では古文・漢文に加えて小説を扱うことすら厳しいのが現状であり、こちらでの対応は考えにくいです。現行の共通テストの問題（現代文）には、複数資料の

読み取り等が含まれるものの、抽象表現と具体的説明の変換、言い換え表現への着目、選択肢における説明の比較検討など、「表現」の問題が中心となっています。しかし、試作問題、特に第A問が要求しているのは、言語表現とはまったく異なる「図」「グラフ」の読み取りであり、あるいは論理的な正誤の判断であって、こうした問題に得点するには、同種の問題に慣れることが必要不可欠です。現状では、試作問題と同様の問題を扱う教材は稀であり、大学入試の小論文には似たような資料があるものの、むしろ選択問題ではないので、生徒に演習を積ませるための教材と時間の確保が今後の課題です。

また、第A問と第B問にかなり違いが見られるため、どちらの方向性で検討されるのかが重要になってくると感じました。



北海道函館中部高等学校
西山竜男 先生

分量

適切

難易度

標準

「現代の国語」「言語文化」での対応

可能

試作問題の難易度・分量ともに適切であると考えます。解答時間は10～15分程度を考えているのではないかと思います。

学習指導要領に示された各科目の目標である、「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」（「現代の国語」）や、「生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けつくとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする」（「言語文化」）に照応させた試作問題であり、テーマもよく、設問の意図もわかりやすいです。

逆に、このような出題がされることで、各授業における題材やテーマの扱い方や視点の置き方などが考慮され、各学校のシラバス作成が具体的になり、学習指導要領の意図を踏まえた授業展開になるだろうと考えます。

共通テストや各種問題集でもさまざまな工夫がなされ

るようになってきましたが、今後は、「ものの見方」を多面的に捉える力を身につけさせることがこれからの社会で生きていく上で重要である、という考えにもとづいた授業展開をしていかななくてはならないと感じています。意見や考え方を汲み取り、それらを踏まえて自分の考えを持つという従来の国語科指導に留まらず、他者はどう捉えているのか、課題とする点はどこにあるのかを考える、多面的な視点を常に意識させる工夫をしていく必要があります。

ただし、正解が1つにならない領域にどんどん踏み込む結果、考查の在り方や評価の仕方が難しくなることが想定されます。旧態依然とした観念のポイントである「関心・意欲・態度」（提出物やノート作成、授業態度）ばかりが重要視されるようにならないかが不安です。

Part 3 座談会 「情報」試作問題分析と指導のポイント

試作問題は各分野から万遍なく出題 活動を中心とした授業で楽しく活用力を身につけることが必要

POINT

- ✓ 各分野から万遍なく出題、社会や身近な生活の中での題材を取り上げている
- ✓ プログラミングの問題は少ない行数ながらアルゴリズムの読み解きを問う良問
- ✓ 実習を中心とした授業で培う知識の活用力が共通テストを解く力につながる

出席者 本文中敬称略

- 東京学芸大学附属高校 飯田秀延先生
- 愛知県立小牧高校 井手広康先生
- 東京都立神代高校 稲垣俊介先生
- 司会：河合塾講師 加賀健司

学校紹介

加賀 本日はよろしくお願いします。始めに先生方の所属や「情報」の設置状況等についてお話しください。

飯田 東京学芸大学附属高校の飯田と申します。今年度は「情報Ⅰ」を1年生で2単位置いています。「情報Ⅰ」の授業では1学期は基本的な事項を学び、2学期はアルゴリズムやプログラミングが主です。言語はPythonです。3学期はインターネットや情報社会を扱う予定です。ほぼ教科書の順番で、すべて扱います。

井手 愛知県立小牧高校の井手と申します。本校も1年生で「情報Ⅰ」を2単位で設置し、「情報Ⅱ」の設置はありません。私は、1年生7クラスの授業を全部担当しています。

私もおおむね教科書通りに進めてきています。今年度は、micro:bit（マイクロビット）を使ってプログラミングの授業を8回行いました。micro:bitを手元で光らせたり、センサを使用して計測したり、生徒はこれまでにない反応で楽しそうでしたが、繰り返しや配列の要素がプ

ログラムに入ってくると、わからなくなる生徒が出てきます。生徒たちは、中学校までにプログラミングを学んでいますので、中学校との接続を意識した授業を実施していきたいと感じています。

稲垣 東京都立神代高校の稲垣と申します。東京都高等学校情報教育研究会の情報Ⅰ大学入試検討専門委員会の委員長も務めています。そのため、情報入試をかなり意識しています。

本校は、1年生に「情報Ⅰ」を2単位置いており、3年生に「情報Ⅱ」を選択科目で2単位置く予定です。私は教科書というより学習指導要領の順番で授業を進めており、「情報社会の問題解決」の部分を1学期にかなりじっくりと行いました。これは他の先生方よりかなり長く取り扱っていると思います。その後に情報デザインとネットワークを扱い、2学期は10時間を使ってプログラミングの授業を行いました。その後、コンピュータ分野の単元を授業で扱い、2学期期末考査になるという流れです。

試作問題『情報Ⅰ』の概況

教科書の広い範囲から万遍なく出題 難易度は共通テストとして見れば易～標準

加賀 ありがとうございます。ここからは試作問題全体を見た印象を各先生におうかがいします。問題の分量、形式あるいは難易度などについてお話をいただければと思います。

飯田 教科書の広い範囲から万遍なく出題されているというのが第一印象です。特定の知識を問うような問題はあまりなく、むしろ問題文を注意深く読めば知識がなくても正解にたどりつける問題です。ただ、知識があった方が素早く解けると思います。

全体的な難易度はそれほど高いという印象はないですが、問題量が多いので素早く処理していく必要があります。そういう訓練をする必要はあると思いました。今後は教科書で学んだ知識を系統立てて全体的に整理した上で、さらに活用できるスキルを生徒に身につけさせる必要があると感じました。問題量は期末試験などに比べれば多いですが、共通テストとして見れば、今回ぐらいの問題量は妥当ではないでしょうか。今回以上に問題数が少なくなると受験者間での得点差がつかなくなると思います。

井手 今回の試作問題ですが、2つの考え方があると思います。1つは、共通テストとして考えたときの判断です。もう1つは、これまで情報の授業を実践してきた情報科教員の立場としての判断です。どちらの立場で考えるかによって分量や難易度についての印象も異なってきます。

まず、共通テストとして見た場合、他教科の共通テストの問題と比較して、分量は標準的で難易度としては易しめではないかという印象を持ちました。

次に、情報科教員の立場で問題を見た場合ですが、愛知県の情報科教員25人にアンケートを行った結果では、難易度は普通と回答した先生とやや難しいと回答した先生が多いです。分量としては多いと回答した先生方が多

くなっています。ただ、これは試験時間の関係もあると思います。私も実際に60分を計って試作問題を解いたのですが、最後の第4問に割ける時間があまりありませんでした。その分、第4問は難しいと感じたのかもしれませんが。問題配置も影響したのではないかと思います。また、プログラミングの問題ですが、問題文を読んだ上でアルゴリズムを自分で考え空欄を埋めるという作業は、授業の中だけでなく授業外でも考えた経験がないとなかなか難しいのではないかと感じました。

加賀 確かに、最初の問題から丁寧に解いていく生徒は、最後の方は時間が厳しくなるという印象はありましたね。

稲垣 「情報Ⅰ」で育成をめざす資質・能力を問う問題になっているとポジティブに捉えています。マニアックな難しい問題でもなく、ただ教科書の内容をなぞるような問題でもありませんでした。出題された分野も、学習指導要領の4つの領域が網羅されています。そして、一番良かったのは、社会や身近な生活の中での題材を取り上げていることです。

難易度ですが、先生方とほとんど意見は一緒で、共通テストという視点で捉えれば標準、もしくは易しいというレベルにあります。問題の分量も標準レベルだと考えます。ただ、今後は段々と難しくなっていくかもしれません。

私も解いてみましたが、生徒たちが何も知らない状態で受験すると時間が足りなくなってしまうという印象です。ただ、ある程度の前提知識がある状態で受けられれば、そんなに時間が足りないということはないだろうと思います。

加賀 各分野から“万遍なく”出題されたことは1つの

図表1 『情報Ⅰ』試作問題の構成

試作問題			「情報Ⅰ」の分野			
大問番号	設問	配点	(1) 情報社会の問題解決	(2) コミュニケーションと情報デザイン	(3) コンピュータとプログラミング	(4) 情報通信ネットワークとデータの活用
第1問	問1	4	○			
	問2	6				○
	問3	6			○	
	問4	4		○		
第2問	A	15	○	○		
	B	15			○	
第3問		25			○	
第4問		25				○

※分野は新学習指導要領の4つの領域に対応。

(大学入試センター「令和7年度大学入学共通テスト 試作問題『情報』の概要」をもとに河合塾で作成)



東京学芸大学附属高校
飯田 秀延 先生

試作問題への感想

分量 標準

難易度 やや易

この量を60分で解くのはかなりのスピードが要求されますが、それは他の教科も同様であるので、大学入学共通テストとしては標準的な分量だと思います。これよりも分量が少ないと、得点差がつきにくいと思いました。

メッセージと受け取ることができるのでしょうか。

稲垣 私はそう思います。高得点は、全範囲を勉強していない限り取れないわけです。4領域から出題してくれたことがすごく嬉しかったですね。生徒たちにも説明がしやすかったです。

飯田 万遍なく出題されたことは、すべてをきちんと授業で扱ってくださいという意味として受け取っています。

日常的に使われている情報技術が 問題の題材に

加賀 ここからは各先生が特徴的だとお感じになった問題について取り上げたいと思います。

飯田 第1問問2のパリティビットの問題です。この後

に出てくる二次元コードもそうですが、身の回りで使われている重要な技術の1つです。こういう問題をきっかけにして授業の中で社会システムを取り上げたり、バーコードのチェックデジットの計算をするような実習をしたりして、生徒に興味を持たせることができると思って注目しました。私も授業ではチェックデジットの計算をする実習を行っています。

井手 私もチェックデジットを扱った授業では、黒板に磁石を8×8に並べて、自分が目をつぶっている間に生徒に1つだけ磁石の裏表を変えさせて、それを当てるという演示を行っています。また、その後は種明かしとともにパリティビットの重要性を説明して、最後に磁石を2つ変えたらどうなるかを考えさせているのですが、今回はまさしくそこが問われました。

稲垣 私も、井手先生と同様に、パリティビットの授業では、磁石を用いた演示を行っています。

私は、第1問では問3の論理回路の問題にも注目しました。理由は、一部の教科書には論理回路が載っていないにも関わらず出題されていたからです。これはある程度、意図的だと思います。つまり、一部の教科書に載っていないけれども、共通テストの問題はリード文さえ読めば解けるというメッセージだと受け止めました。次の真理値表を選ばせる問題も、事前知識がある生徒は問題文だけを読んで解答が想像できるようになっていますが、そこで思いつかない生徒も手を動かして表を書きさえすれば解けます。

飯田 第1問では、問4の情報デザインの問題にも注目

図表2 『情報Ⅰ』試作問題のキーワード

大問番号	設問	キーワード
第1問	問1	SNS、メール、Webサイト、情報の信ぴょう性
	問2	通信データの誤り訂正、パリティビット、基数変換
	問3	論理回路、論理演算、真理値表
	問4	情報デザイン、情報整理
第2問	A	二次元コード、知的財産権
	B	文化祭、待ち状況、確率モデル、シミュレーション
第3問		代金の支払い、アルゴリズム、プログラミング
第4問		データの活用と分析、グラフの読み取り、箱ひげ図、回帰直線
(参考問題) 第4問		時系列のデータ、移動平均、相関係数

(大学入試センター「令和7年度大学入学共通テスト 試作問題『情報』の概要」をもとに河合塾で作成)

しました。私も、定期試験などで情報デザインの問題をどう作るか是非常に悩むところです。この問題の作問者も非常に苦労されたのではないかと思います。日常の場面で情報デザインがどのように生かされているかを意識させるのはちょうど良い問題なのではないかと思いました。

井手 私も、情報デザインの問題は作問が難しいと感じています。情報デザインとは、自分の伝えたいことをどうやって的確に、正確に相手に伝えるかということです。正解があるわけではなく、問題にしづらいというのが要因の1つにあると思います。どういう問題になるのか期待していましたが、もう少しデザイン寄りの問題を出してほしかったというのが正直なところです。

稲垣 情報デザインは本当に出題しにくい分野であると思います。出題するとしたら、標本化・量子化・符号化の辺りが出題しやすいでしょうか。あとはモデル化やアクセシビリティなどですが、単に知識を問う問題になっ



愛知県立小牧高校
井手 広康 先生

試作問題への感想

分量 標準

難易度 標準

共通テストとして考えたときの分量と難易度は上記のようになります。ただし、授業を1年間受けただけの生徒にとっては、難易度は難しく、分量も多いと感じると思います。そのため、別途、授業外での対応が必要になると思います。

てしまわないような工夫が必要ではないかと考えます。

井手 私は、第2問Aの二次元コードの問題を取り上げたいと思います<図表3>。今回の試作問題は、高校の先生に対して授業改善を促すだけではなく、模試や問題集を作る出版社や予備校、情報を学んだ高校生を受け入れるための入試を行う大学に対するメッセージとしての側面を強く持っています。また、社会や保護者に対して高校での学びを伝える重要な役割を担っています。

その中で、身の回りの事象と情報との結びつきを示す題材として、二次元コードを取り上げたことは納得が이었습니다。今や二次元コードはよく使われている技術ですが、どのような仕組みで情報が記録されていたり、また情報を読み取っているのかというレベルまで考えられる人は少ないと思います。この問題は、身の回りや身近なところにも目を向け、問題を発見しようというメッセージになっていて、私にとっては衝撃的でした。

その中で、身の回りの事象と情報との結びつきを示す題材として、二次元コードを取り上げたことは納得が이었습니다。今や二次元コードはよく使われている技術ですが、どのような仕組みで情報が記録されていたり、また情報を読み取っているのかというレベルまで考えられる人は少ないと思います。この問題は、身の回りや身近なところにも目を向け、問題を発見しようというメッセージになっていて、私にとっては衝撃的でした。

飯田 私も本当にそう思います。技術的なことを知らずに使っている身の回りのものは多いと思います。情報をしっかり勉強すると、こんな面

図表3 試作問題『情報I』第2問

問2 下線部Aの目印は、図2のように、例えば(a)～(c)のどの角度で読み取っても、黒白黒白黒の比が1:1:3:1:1となることで、二次元コードの目印として認識できるようになっている。これは、図3のように円形の目印でも同じと考えられるが、正方形の方が都合がよい。その理由として最も適当なものを、後の①～③のうちから一つ選べ。 イ

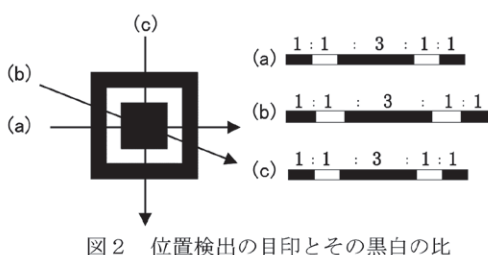


図2 位置検出の目印とその黒白の比

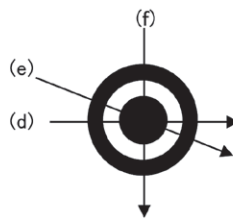


図3 円形の目印

- ① 円形では、(d)～(f)の角度によって黒白の比が異なってしまう、正しく読み取れなくなる可能性があるから。
- ② 円形だと上下左右がないので、二次元コードの向きが分からなくなるから。
- ③ プリンタやディスプレイの解像度によっては、正方形の目印に比べて正しく読み取れる小さな円形の目印を作ることが難しくなるから。
- ④ 円形では目印が斜めに傾いていても、それを認識することができないため正しく読み取ることができないから。

(大学入試センター「令和7年度大学入学共通テスト 試作問題『情報I』」より)



東京都立神代高校
稲垣 俊介 先生

試作問題への感想

分量 標準

難易度 易～標準

取り扱われたテーマは身近な話題が多かったです。また、授業で扱っていない題材でも、リード文を読むことによって解くことができます。しかし、知識があれば、リード文を読み込まずに解くことができる問題もありました。

白いことがわかるという気づきにつながる問題です。

稲垣 さらに、第2問A問1の特許の設問は良いと思いました。二次元コードは、著作権がその特許権を行使しなかったため世の中に広まったという、日本の情報技術の学びになるような問題です。生活の中にあつて皆がよく知っている二次元コードを、さまざまな視点から深く考えるということ自体が面白いと感じています。解き終わったときに生徒たちも納得感があるのではないのでしょうか。

第3問 プログラミング 短い行数で洗練された内容

加賀 第3問プログラミングの問題はいかがでしょうか。

井手 プログラミングの問題は情報の先生方をはじめ、多くの方が注目していたと思いますが、私が一番驚いたのはプログラミングの行数が8行と明らかに少ないことです。今回の試作問題は、プログラム自体の難しさではなく、与えられた問題文をしっかりと読解し、それをアルゴリズムに置き換える作業の難しさが特徴です。プログラムには一般的なパターンがあるとはいえ、6～8回程程度の授業の中で、生徒にそれらのパターンを身につけさせることは難しいと思います。

さらに、今回はプログラムの中で「増やしながらかえり返す」ではなく、「減らしながらかえり返す」が問われました。これは、私もこれまでに授業では扱ったことがなかったので、強く印象に残っています。

稲垣 その場できちんと考えて、アルゴリズムを読み解

くことができるかを問うタイプの問題になっています。また、どの言語を授業で扱っていても対応できる問題にもなっています。加えて、短いプログラムでこれほど深い問題となっている点でも、本当によくできていると思います。

飯田 どんな言語でもいいのですが、1度は自分でプログラムを組んだ経験がないと解けない問題でしょう。ただ、授業ではプログラミングにける時間は多くても10時間ぐらいだと思いますので、その中で一定のスキルを身につけさせるには、どうしたものか悩ましいところですね。

加賀 授業時間という制約がどうしてもありますね。この問題はお釣りを題材としている点で、終始一貫して身の回りの事象へのこだわりが見受けられます。プログラムの長さ以外に特徴はありますか。

井手 旧試作問題(2020年11月)とサンプル問題(2021年3月)は、2回とも、1つの大問の中で「問題の発見」「問題の解決」「評価と改善」という一連のプロセスが問われていましたが、今回は「評価と改善」にあたる設問がありませんでした。

稲垣 短いプログラムでここまで膨らませた良問にしてあることと、お釣りが題材で生徒にとって身近に感じられる問題ということで、とても好ましい印象です。

第4問 データの活用 データの読み取りを問う点が数学と異なる

稲垣 私は、データの活用の授業で、全生徒のスマートフォンの利用時間を集めて生徒自身に分析させるという取り組みを毎年やっています。この問題は、その授業に近い内容だと思いました。実際に、この試作問題を、生徒の活動につなげることもできると思います。

問2、問3は箱ひげ図から読み取れるものは何かという問題が続いているのですが、私はこれが数学との差別化だと思っています。数学では、与えられたデータから計算で統計量を求めることになりますが、情報ではデータから読み取れるのは何かを問うわけですね。問題の質としては数学の問題に似ているところはあると思いますが、出題の仕方は全然違うものです。

井手 データをグラフ化して、そこから何がわかるのか

を分析し、現状を改善させていく方法を導き出すというところが、数学と差別化ができるところではないかと思います。その点でこの問題は数学ではなく情報だという印象を持ちました。

飯田 おそらく、多くの情報の先生が見れば、この問題は数学という印象を持たれるのは自然だと思います。ただ、最近の生徒は、探究活動や他の教科などでこうした内容は結構取り組んでいます。私も授業で、過去30年間の新潟県の平均気温と一等米の割合の関係を、散布図にして回帰直線を書いたり、相関係数を取ったりするなどして分析する実習を行いましたので、それらを経験した生徒にとっては、この問題を見てもあまり戸惑いはないと思います。

加賀 第4問は、参考問題も出題されました。こちらの問題についてはいかがでしょうか。

稲垣 参考問題は、グラフがあまり見慣れないものではありますが、難易度は高くはないと思います。しかし、初めて見た生徒は驚くかもしれません。初見でも思考力を使って解く問題というパターンで出題されたという印象です。

飯田 似たようなグラフを授業で扱ったことがあれば、生徒はあまり違和感がないと思います。ただ、移動平均を授業で扱うことはあまりないですね。

井手 まず移動平均法が出てきて驚きました。問3の図は相関係数の推移を表した棒グラフですが、旧試作問題やサンプル問題にはなかった初めて見るタイプのグラフです。また、12カ月ごとに売り上げが変化するなど、問われていることは当たり前のことではありますが、考えさせられる問題でした。

試作問題『旧情報(仮)』の特徴

**「社会と情報」は「情報の科学」よりも易しい
既卒生は問題選択にも注意**

加賀 経過措置である『旧情報(仮)』（以下、『旧情報』）の試作問題についてはいかがでしょうか。

飯田 「社会と情報」と「情報の科学」が選択問題として出題されましたが<図表4>、「社会と情報」の方が易しめで、「情報の科学」を選択すると難しいのではな



河合塾講師
加賀 健司

河合塾 情報科入試研究プロジェクトメンバー。教科書や大学入学共通テスト試作問題を分析。共通テスト対策用テキストの作成などにも携わっている。

いかという印象です。

井手 私も「社会と情報」と「情報の科学」の問題の難易度が大きく乖離していると感じました。今回のような出題内容であれば、「情報の科学」よりも「社会と情報」を選択する方が、平均点は明らかに高くなるだろうと思います。

また、今回の試作問題では、『情報Ⅰ』と比べると『旧情報』は易しいと思います。令和7年度のみ共通テスト「情報」には得点調整がありますが、選択科目によって平均点に大きな差が開きそうな気がしています。

稲垣 私も、『旧情報』は『情報Ⅰ』より易しく感じました。既卒生への配慮もあるでしょう。『旧情報』の選択問題については、「情報の科学」を履修していた生徒

図表4 試作問題『旧情報(仮)』の選択方法と主たる範囲

問 題	選 択 方 法	主たる範囲
第1問	必 答	「社会と情報」 「情報の科学」
第2問	いずれか1問を選択し、 解答しなさい。	「情報の科学」
第3問		「社会と情報」
第4問	必 答	「社会と情報」 「情報の科学」
第5問	いずれか1問を選択し、 解答しなさい。	「情報の科学」
第6問		「社会と情報」

※選択問題は高等学校での履修の有無に関係なく選択し、解答できる。

(大学入試センター「令和7年度大学入学共通テスト
試作問題『旧情報(仮)』より)

も、当日の問題を見て「社会と情報」を選ぶことも選択肢になるかもしれません。

また、「社会と情報」は、4分野すべてから出題されていますが、「情報の科学」はデータベースの分野から出題されていません。このあたりは本番でどうなるか気になります。

試作問題を踏まえた授業改善

活動を重視した授業づくりが重要 入試との接続も意識した指導を行いたい

加賀 今回の試作問題を受けて、授業が変わっていく可能性はあるのでしょうか。

飯田 アウトプットする活動を多めに取り入れることを意識しながら指導していくことになると思います。また、従来と変わらず教科書を全体的に万遍なく学習しながら、知識を系統立てて整理して、活用できる能力を身につけられるよう、意識しながら指導していこうと思います。

単に知識を覚えるだけではなく、使えるようにならないといけませんので、身近な問題を題材に、学んだことが使える場を設定して、生徒が楽しみながら授業を受けられるよう心がけていきたいと思っています。

井手 私は、生徒同士のディスカッションの時間や、生徒自身が試行錯誤しながらプログラムを改善する時間が必要だと思いますし、そういう授業づくりをしていかなければいけません。ただ、今回の試作問題を見て、授業だけでは時間が足りないの、自宅学習や長期休暇での課題などをうまく利用しなければいけないと感じました。

加賀 生徒が学んだことを積極的に使いこなす場に加えて主体性が求められるということですね。そのための教材づくり、授業づくりが難しいですね。

井手 そこが教員の腕の見せどころだと感じます。どうやって情報の楽しさを伝えるか、いかに身の回りの事象に疑問を持たせるか、どうやって生徒が主体的に学習するように導くのか。難しい課題ですが、そうなるように授業改善を行っていかなければいけないのだと強く思います。

稲垣 情報が共通テストで出題されることになり、情報の先生方の気持ちも生徒たちの目線も変わってくると思

います。ただ、そこで気をつけたいのは、いかにも受験指導のような授業にならないようにすることです。やはり授業は実習を中心に行っていくべきだと思います。生徒たちが入試問題に向き合ったとき、実習を通じて学んだ内容が入試問題になるところなのか、という気づきにつながることが一番大事なことだと思います。

2単位という制約はありますが、私は自作の解説動画などで知識の習得をフォローする工夫をしています。また、宿題で実習をさせることもできますが、私はグループ学習にこだわっています。なぜなら皆で議論しながら進める授業が生徒にとって楽しいと感じるであろうと考えるためです。ただ、これは高校1年生の「情報Ⅰ」の話です。高校3年生では受験教科として、考え方を変えていくことも必要でしょうね。

加賀 身の回りの事象から、いかに生徒たち自身が課題を発見して取り組んでいくのか、学んだことを使いこなす場面の仕掛けは必要ですね。ただ、共通テストの出題教科となったことで、これまでとは異なる影響を受ける可能性はあるかもしれません。

飯田 先日、ある生徒が「授業中にもっと問題演習をしてほしい」と言ってきました。今までにはなかったことです（笑）。予備校での講座や問題集も少ないため、生徒は授業でも入試対策をしてほしいと思っているようです。

井手 入試科目となったことで、確かに情報の位置づけが重くなりましたが、その中でいかに楽しく教えていくかが、情報科の教員の責任ではないかと感じます。生徒たちが社会に出たときに、高校で学んだ身の回りの事象についての見方・考え方や問題解決の手順が生かされ、よりよい社会の実現のために還元される、これこそが楽しいところでもあると思います。

3年間を見越した指導

実習の内容を受験勉強時にも想起させる 授業の仕掛けが重要

加賀 「情報」を苦手とする生徒に特徴はありますか。

稲垣 まだ高校1年生ですので、あまり顕著な違いはないと思いつつも、やはり適性はありそうです。特にプログラミングはそうだと思います。だからこそ、苦手な生

徒が嫌いにならないような仕掛けが、どの単位でも必要だと思っています。私は、理系の科目ではないと思わせる仕掛けとして、問題解決の単元を1学年の最初に扱い、時間もかけています。いろいろな問題解決の手法や考え方を示し、情報の授業は、君たちがSociety5.0の担い手になるために必要で、文系理系は関係ないと話して締めくくります。このように、「情報」はすべての生徒にとって重要な教科だと、強調して伝えることは大切です。ここには思い入れがあります。

飯田 今回の試作問題では直接的な理系的な問題は出ませんでしたので、情報は文理関係なく大切というのが今後の流れだろうと思います。ただ、出題の難易については、他教科の今までの傾向を見ても、年々難しくなっており、情報でも同じことが起きるかもしれません。そのときに、文系の生徒が取り組みやすいような題材や授業が必要になってくると思います。

井手 プログラミングを指導していると、得意不得意の差は顕著に現れていると思いました。ただ、数学が得意だからプログラミングも得意というより、論理的に物事を考えられるかどうか、というところが違いのような気がしています。

不得意な生徒はいますが、大切なのは、全員が同じレベルまで到達するというよりも、得意な生徒は発展問題を通して、どんどん進めて力を伸ばせばいいですし、わからない生徒には教員がサポートしたり、周りの得意な生徒が教えたりするなど、情報が苦手であっても嫌いにならないような楽しいと思わせる授業づくりが大事になります。

加賀 1年生で「情報Ⅰ」を置く高校が多いと思いますが、3年間を通した指導スケジュールについてはどのよ

うにお考えでしょうか。

稲垣 一番難しいのは、2年次がまるまる空いてしまう問題かと思いますが、対応については模索中です。ただ、3年次にはやはり自由選択でもいいので授業として行いたいと思います。その際は、1年生の内容を復習するような課題から始めることがとにかく大事だと思っています。本校は、3年生で「情報Ⅱ」を置く予定ですが、そうではない高校も多いと思います。そういった学校では、受験に必要な生徒たちを集めて講習などを行うのが、入試に送り出す側の役割ではないかと思っています。

井手 2年生は何もしないのではなく、1年生で身につけた力を伸ばす期間だと思います。情報を中心として学んだ情報活用能力を2年生ではさまざまな場面で生かしていくのです。たとえば、「総合的な探究の時間」は教科横断的に情報活用能力を生かすことができる場面の1つです。そうすれば空白の1年間は生まれません。

とはいえ、これは理想であって、現実には難しいところがあります。夏休みなどに補習を行うなどの方法もあると思います。

飯田 本校では、2、3年次にカリキュラムの中で情報の講座を置く予定は今のところありません。1年次に1年間しっかりと基本の修得に取り組み、3年次の夏の講習や直前期の講習で、それらを思い出しながら、問題演習などを行うことを検討しています。

加賀 2年生で情報を取り扱わない期間は生じますが、3年生の時に1年生の時の実習を想起させる授業をいかに行うか、そのためには1年生の時の仕掛けが重要になってきますね。そういう意味で、授業では情報の面白さを追求していく必要もあると思いました。本日はお忙しいところありがとうございました。

もっと
知りたい
方へ

わくわく★キャッチ

新時代の高校生を育てる高校教育サイト

キミのミライ発見

情報化で変わる社会でキャリアを築く学びのために

河合塾
情報教員応援サイト

主な内容

- 教科「情報」の授業実践事例の紹介
- 共通テスト試作問題、情報入試の過去問題を学習指導要領・学習内容の分野別に整理
(過去問題には河合塾作成の解答例を添付)

- 情報教育関係の学会・シンポジウムレポート、有識者インタビュー
- 「中高生情報学研究コンテスト」入賞事例の紹介
- 情報入試を実施する大学の一覧

※「キミのミライ発見」URL <https://www.wakuwaku-catch.net/>